

---

巻数

作者

サンプルサークル



夜行巡査

泉鏡花

【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

(例) 爺じいさん

一：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

(例) 人心みこち地

〔#〕：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(例) 〔#地付き〕 (明治二十八年四月「文芸倶楽部」)

「こう爺じいさん、おめえどこだ」と職人体の壮わ佼かは、そのかたわらなる車夫の老人に向かいて問い懸かけたり。車夫の老人は年紀としすでに五十を越えて、六十にも間はあらじと思わる。餓えてや弱々しき声のしかも寒さにおのきつつ、

「どうぞまっぴら御免なすつて、向後こうごきつと氣を着けます。へいへい」と、どぎまぎして慌あわておれり。

「爺さん慌てなさんな。こう己おや巡查じやねえぜ。え、おい、かわいそうによつぽど面食らつたと見える、全体おめえ、氣が小さすぎらあ。なんの縛ろうとは謂いやしめえし、あんなにびくびくしねえでものことさ。おらあ片一方で聞いててせえ少すこ癩かん癩やくに障さわつて堪こたえられなかつたよ。え、爺さん、聞きやおめえの扮装みなりが悪いとつて咎とがめたようだっけが、それにしちやあ咎めようが激しいや、ほかにおめえなんぞ仕損しぞいでもしなすつたのか、ええ、爺さん」

問われて老車夫は吐息をつき、

「へい、まことにびっくりいたしました。巡査おまわりさんに咎められましたのは、親父おやじ今はじめで、はい、もうどうなりますことやらと、人心地ごこちもござりませなんだ。いやもう

から意気地いくじがござりません代わりにや、けつして後ろ暗いことはいたしません。ただいまとても別にぶちようほうのあつたわけではござりませんが、股引きももひが破れまして、膝ひざから下むきだが露出むきだしてござりまするので、見苦しいと、こんなにおつしやります、へい、御規則も心得ないではござりませんが、つい届きませんもんで、へい、だしぬけにこら！ 　つて喚わめかれましたのに驚きまして、いまだに胸がどきどきいたしまする」

　　壮佼はしきりに頷うなずけり。

「むむ、そうだろう。気の小さい維新むかし前の者は得て巡的をこわがるやつよ。なんだ、高がこれ股引きがねえからとつて、ぎょうさんに咎め立てをするにやあたらねえ。主の抱かかえ車ぐるまじゃあるめえし、ふむ、よけいなおせつかいよ、なあ爺さん、向こうから謂わねえたつて、この寒いのに股引きはこつちで穿はきてえや、そこがめいめいの内証で穿けねえから、穿けねえのだ。何も穿かねえというんじやねえ。しかもお提ちようちん灯灯より見つこのねえ闇夜やみだろうじやねえか、風俗も糸瓜へちまもあるもんか。うぬが商売で寒い思いをするからたつて、何も人民にあたるにやあ及ばねえ。ん！　寒かん鴉がらすめ。あんなやつもめつたにやねえよ、往來の少ない処ところなら、昼だつてひよぐるぐらいは大目に見てくれらあ、業腹な。おらあ別に人の禪ふんじし襠すまうで相撲を取るにもあたらねえが、これが若いものでもあることか、かわいそ

うによぼよぼの爺さんだ。こう、腹あ立てめえよ、ほんにき、このぎまで腕車を曳くなあ、よくよくのことだと思ひねえ。チョツ、べら棒め、サーベルがなけりや袋叩きにしてやろうものを、威張るのもいいかげんにしておけえ。へん、お堀端あこちとらのお成り筋だぞ、まかり間違やあ胴上げして鴨のあしらいにしてやらあ」

口を極めてすでに立ち去りたる巡査を罵り、満腔の熱気を吐きつつ、思わず腕を擦りしが、四谷組合と記したる煤け提灯の蝋燭を今継ぎ足して、力なげに梶棒を取り上ぐる老車夫の風采を見て、壮佼は打ち惜るるまでに哀れを催し、「そうして爺さん稼人はおめえばかりか、孫子はねえのかい」

優しく謂われて、老車夫は涙ぐみぬ。

「へい、ありがとう存じます、いやも幸いと孝行なせがれが一人おりました、よう稼いでくれまして、おまえさん、こんな晩にや行火を抱いて寝ていられるもつたいない身分でござりましたが、せがれはな、おまえさん、この秋兵隊に取られましたので、あとには嫁と孫が二人みんな快う世話をしてくれませんが、なにぶん活計が立ちかねますので、蛙の子は蛙になる、親仁ももとはこの家業をいたしておりましたから、年紀は取つてもちつとは呼吸がわかりますので、せがれの腕車をこうやって曳きますが、何が、達者で、きれいで、

安いという、三拍子も揃ったのが競争をいたしますのに、私のような腕車には、それこそお茶人か、よつほど後生のよいお客でなければ、とても乗ってはくれませんで、稼ぐに追いつく貧乏なしとはいいますが、どうしていくら稼いでもその日を越すことができにくうござりますから、自然装なんでも構うことはできませんので、つい、巡査さんに、はい、お手数を懸けるようにもなります」

いと長々しき繰り言をまだるしとも思わで聞きたる壮伎は一、方ならず心を動かし、

「爺さん、いやたあ謂われねえ、むむ、もつともだ。聞きや一人息子が兵隊になつてるというじゃねえか、おおかた戦争にも出るんだらう、そんなことなら黙つていないで、どしどし言い籠めて隙あ潰さした埋め合わせに、酒代でもふんだくつてやればいいに」

「ええ、めつそうな、しかし申しわけのためばかりに、そのことも申しましたなれど、いっこうお肯き入れがござりませんので」

壮伎はますます憤りひとしお憐れみて、

「なんとという木念人だらう、因業な寒鴉め、といったところで仕方もないかい。ときに爺さん、手間は取らさねえからそこいらまでいつしよに歩びねえ。股火鉢で五合とやらかそう。ナニ遠慮しなさんな、ちと相談もあるんだからよ。はて、いいわな。おめえ稼

業にも似合わねえ。ばかめ、こんな爺さんを掴めえて、劍突もすさまじいや、なんだと思つていやがんでえ、こう指一本でも指してみる、今じゃおいらが後見だ」

憤慨と、軽侮と、怨恨とを満たしたる、視線の赴くところ、麴町一番町英国公使館の土塀のあたりを、柳の木立ちに隠見して、角燈あり、南をさして行く。その光は暗夜に怪獣の眼のごとし。

## 二

公使館のあたりを行くその怪獣は八田義延という巡査なり。渠は明治二十七年十二月十日の午後零時をもつて某町の交番を発し、一時間交替の巡回の途に就けるなりき。

その歩行や、この巡査には一定の法則ありて存するがごとく、晩からず、早からず、着々歩を進めて路を行くに、身体はきつとして立ちて左右に寸毫も傾かず、決然自若たる態度には一種犯すべからざる威厳を備えつ。

制帽の底の下にもものすごく潜める眼光は、機敏と、鋭利と厳酷とを混じたる、異様の光に輝けり。



渠は左右のものを見、上下のものを視ながむるとき、さらにその顔を動かし、首を掉ふることをせざれども、瞳ひとみは自在に回転して、随意にその用を弁わざるなり。

されば路すがらの事々物々、たとえはお堀ほり端ばたの芝生しばふの一面に白くほの見ゆるに、幾条くちなわの蛇はの這はえるがごとき人の踏みしだきたる痕あとを印せること、英国公使館の二階なるガラス窓の一面に赤黒き燈火の影の射させること、その門前なる二柱ちゆうのガス燈の昨夜よりも少しく暗きこと、往來のまん中に脱ぎ捨てたる草鞋わらじの片足の、霜に凍いて附つきて堅くなりたること、路みち傍ばたにすすくと立ち併ならべる枯れ柳の、一陣の北風に颯さと音なしていつせいに南みなに靡なびくこと、はるかあなたにぬつくと立てる電燈局の煙筒より一縷いちるの煙の立ち騰のぼること等、およそ這般このはんのささいなる事がらといえども一つとしてくだんの巡査の視線以外のがに免のがることを得えざりしなり。

しかも渠は交番を出いでて、路に一個の老車夫を叱しつ責せきし、しかしてのちこのところに来たれるまで、ただに一回も背後うしろを振り返りしことあらず。

渠は前途に向かいて着眼の鋭く、細かに、きびしきほど、背後うしろには全く放心せるもののごとし。いかんとなれば背後はすでにいったんわが眼まなこに檢察して、異状なしと認めてこれを放免したるものなればなり。

兇徒きようとあり、白刃ふるを揮うしろいて背後うしろより渠きを刺ささんか、巡査はその呼吸いきの根の留まらんまでは、背後うしろに人あるということに、思おもひいたることはなかるべし。他なし、渠はおのが眼まなこの觀察の一度達したるところには、たとい藕糸ぐうしの孔中といえども一点の懸念をだに遺のこしおかざるを信ずるによれり。

ゆえに渠は泰然と威厳を存して、他意なく、懸念なく、悠々ゆうゆうとしてただ前途のみを志すを得るなりけり。

その靴くつは霜のいと夜深きに、空谷を鳴らして遠く磴きようおん音を送りつつ、行く行く一番町の曲がり角のややこなたまで進みけると、右側のとある冠木門かぶきの下に踞うずくまれる物体ありて、わが磴あしおと音に蠢うごめるを、例の眼にてきつと見たり。

八田巡査はきつと見るに、こはいと窶やつやつ々しき婦人おんななりき。

一個ひとりの幼児おきなごを抱きたるが、夜深よふけの人目なきに心を許しけん、帯を解きてその幼児を膚はだに引き緊しめ、着たる檻樓らんるの綿入れを衾ふすまとなして、少しにても多量の暖を与えんとせる、母の心はいかなるべき。よしやその母子おやこに一銭の恵みを垂たれずとも、たれか憐あわれと思わざらん。

しかるに巡査は二つ三つ婦人の枕まくらもと頭かぶに足踏みして、

「おいこら、起きんか、起きんか」

と沈みたる、しかも力を籠めたる声にて謂えり。

婦人はあわただしく蹶ね起きて、急に居住まいを繕いながら、

「はい」と答うる齒の音も合わず、そのまま土に頭を埋めぬ。

巡査は重々しき語気をもて、

「はいではない、こんな処に寝ていちやあいかん、疾く行け、なんという醜態だ」

と鋭き音調。婦人は恥じて呼吸の下にて、

「はい、恐れ入りましたでございます」

かく打ち謝罪るときしも、幼児は夢を破りて、睡眠のうちに忘れたる、饑えと寒さとを  
思い出し、あと泣き出だす声も疲労のために裏涸れたり。母は見るより人目も恥じず、慌  
てて乳房を含ませながら、

「夜分のことでございますから、なにとぞ旦那様お慈悲でございます。大眼に御覧あそば  
して」

巡査は冷然として、

「規則に夜昼はない。寝ちやあいかん、軒下で」

おりからひとしきり荒ぶ風は冷を極めて、手足も露わなる婦人の膚を裂きて寸断せんとせり。渠はぶるぶると身を震わせ、鞆のごとくに竦みつつ、

「たまりません、もし旦那、どうぞ、後生でございます。しばらくここにお置きあそばしてくださいまし。この寒さにお堀端の吹き曝しへ出ましては、こ、この子がかわいそうでございます。いろいろ災難に逢いまして、にわか物貫いで勝手は分りませず……」といいかけて婦人は咽びぬ。

これをこの軒の主人に請わば、その諾否いまだ計りがたし。しかるに巡査は肯き入れざりき。

「いかん、おれがいったんいかんといったらなんといつてもいかんのだ。たといきさまが、観音様の化身でも、寝ちやならない、こら、行けというに」

## 三

「伯父さんおあぶのうございますよ」

半蔵門の方より来たりて、いまや堀端に曲がらんとするとき、一個の年紀少き美人は

その同伴なる老人の蹣跚たる酔歩に向かいて注意せり。渠は編み物の手袋を嵌めたる左の手にぶら提灯を携えたり。片手は老人を導きつつ。

伯父さんと謂われたる老人は、ぐらつく足を踏み占めながら、

「なに、だいじようぶだ。あれんばかりの酒にたべ酔つてたまるものかい。ときにもう何時だろう」

夜は更けたり。天色沈々として風騒がず。見渡すお堀端の往来は、三宅坂にて一度尽き、さらに一帯の樹立ちと相連なる煉瓦屋にて東京のその局部を限れる、この小天地寂として、星のみひやかに冴え渡れり。美人は人ほしげに振り返りぬ。百歩を隔てて黒影あり、靴を鳴らしておもむろに來たる。

「あら、巡查さんが來ましたよ」

伯父なる人は顧みて角燈の影を認むるより、直ちに不快なる音調を帯び、

「巡查がどうした、おまえなんだか、うれしそうだな」

と女の顔を瞻れる、一眼盲いて片眼鏡し。女はギツクリとしたる様なり。

「ひどく寂しゆうございますから、もう一時前でもございませうか」

「うん、そんなものかもしれない、ちつとも腕車が見えんからな」

「ようございますわね、もう近いんですもの」

やや無言にて歩を運びぬ。酔える足は抄取らで、靴音は早や近づきつ。老人は声高に、  
「お香、今夜の婚礼はどうだった」と少しく笑みを含みて問いぬ。

女は軽くうけて、

「たいそうおみごとでございました」

「いや、おみごとばかりじゃあない、おまえはあれを見てなんと思った」

女は老人の顔を見たり。

「なんですか」

「さぞ、うらやましかつたらうの」という声は嘲るごとし。

女は答えざりき。渠はこの一冷語のためにいたく苦痛を感じたる状見えつ。

老人はさこそあらめと思える見得にて、

「どうだ、うらやましかつたらう。おい、お香、おれが今夜彼家の婚礼の席へおまえを連れて行つた主意を知つとるか。ナニ、はいだ。はいじゃない。その主意を知つてるかよ」

女は黙しぬ。首を低れぬ。老夫はますます高調子。

「解るまい、こりやおそらく解るまいて。何も儀式を見習わせようたためでもなし、別に御

馳走を喰わせたいたいと思ひもせずさ。ただうらやましがらせて、情けなく思わせて、おまえが心に泣いている、その顔を見たいばかりよ。ははは」

口氣酒芬を吐きて面をも向くべからず、女は悄然として横に背けり。老夫はその肩に手を懸けて、

「どうだお香、あの縁女は美しいの、さすがは一生の大札だ。あのまた白と紅との三枚襲で、と羞ずかしそうに坐つた恰好というものは、ありや婦人が二度とないお晴れだな。縁女もさ、美しいは美しいが、おまえにや丸目だ。婿もりっぱな男だが、あの巡査にや一段劣る。もしこれがおまえと巡査とであつてみる。さぞ目の覚むることだろう。なあ、お香、いつぞや巡査がおまえをくれろと申し込んで来たときに、おれさえアイと合点すりや、あべこべに人をうらやましがらせてやられるところよ。しかもおまえが（生命かけても）という男だもの、どんなにおめでたかったかもしれやアしない。しかしどうもそれ随意にならないのが浮き世つてな、よくしたものさ。おれという邪魔者がおつて、小氣味よく断わつた。あいつもとんだ恥を搔いたな。はじめからできる相談か、できないことか、見当をつけて懸かればよいのに、何も、八田も目先の見えないやつだ。ばか巡査！」

「あれ伯父さん」

と声ふるえて、後ろの巡査に聞こえやせんと、心を置きて振り返れる、眼に映ずるその人は、……夜目にもいかで見紛うべき。

「おや！」と一言われ知らず、口よりもれて愕然たり。

八田巡査は一注の電気に感ぜしごとくなりき。

#### 四

老人はとつさの間に演ぜられたる、このキツカケにも心着かでや、さらに気に懸くる様子もなく、

「なあ、お香、さぞおれがことを無慈悲なやつと怨んでいよう。吾やおまえに怨まれるのが本望だ。いくらでも怨んでくれ。どうせ、おれもこう因業じゃ、いい死に様もしやアしまいが、何、そりやもとより覚悟の前だ」

真顔になりて謂う風情、酒の業とも思われざりき。女はようよう口を開き、

「伯父さん、あなたまあ往来で、何をおっしゃるのでございます。早く帰ろうじやございませんか」



と老人の袂たもとを曳ひき動かし急ぎ巡査を避けんとするは、聞くに堪えざる伯父の言ことばを渠かれの耳に入れじとなるを、伯父は少しも頓とんじやく着やくせで、平氣に、むしろ聞こえよがしに、

「あれもさ、巡査だから、おれが承知しなかつたと思われると、何か身分のいい官員か、  
 金かねもち満みちでも扱えらんでいて、月給八円におぞ毛をふるつたようだが、そんな賤いやしい了りようけん簡けんじやない。おまえのきらいな、いつしよになると生き血を吸われるような人間でな、たとえ  
 ばかつたい坊だとか、高利貸しだとか、再犯の盜ぬす人とでもいうような者だつたら、おれは喜んで、くれてやるのだ。乞食こしきでもあつてみる、それこそおれが乞食をしておれの財産をみなそいつに譲つて、夫婦めおとにしてやる。え、お香、そうしておまえの苦しむのを見て  
 楽しむさ。けれどもあの巡査はおまえが心しんからすいてた男だろう。あれと添そわれなけりや  
 生きてる効かいがないとまでに執心しやくしんの男だ。そこをおれがちやんと心得てるから、きれいさつぱりと断きわつた。なんと慾よくのないもんじやあるまいか。そこでいったんおれが断きわつた上  
 はなんでもあきらめてくれなければならぬと、普通なみの人間ならいうところだが、おれが  
 のはそうじやない。伯父さんがいけないとおっしゃつたから、まあ私も仕方がないと、お  
 まえにわけもなく断念あきらめてもらつた日にやあ、おれが志も水の泡あわさ、形なしになる。とこ  
 ろで、恋というものは、そんなあさはかなもんじやあない。なんでも剛胆けんのんなやつが危険

な目に逢えば逢うほど、いつそう剛胆になるようで、何かしら邪魔がはいれば、なおさら恋しゆうなるものでな、とても思い切れないものだということを知っているから、ここでおもしろいのだ。どうだい、おまえは思い切れるかい、うむ、お香、今じゃもうあの男を忘れたか」

女はややしばらく黙したるが、

「い……い……え」ときれぎれに答えたり。

老夫は心地よげに高く笑い、

「むむ、もつともだ。そうやすつぽくあきらめられるようでは、わが因業も価値がねえわい。これ、後生だからあきらめてくれるな。まだまだ足りない、もつとその巡査を慕うてもらいたいものだ」

女はこらえかねて顔を振り上げ、

「伯父さん、何がお気に入りませんで、そんな情けないことをおっしゃいます、私は、……」と声を飲む。

老夫は空 嘯き、

「なんだ、何がお気に入りません？ 謂うな、もつたないない。なんだってまたおそらくお

まえほどおれが気に入ったものはあるまい。第一容色はよし、気立てはよし、優しくはある、することなすこと、おまえのことといったら飯のくいようまで気に入るて。しかしそんなことで何、巡査をどうするの、こうするのという理窟はない。たといおまえが何かの折に、おれの生命を助けてくれてき、生命の親と思えばとても、けっして巡査にやあ遣らないのだ。おまえが憎い女ならおれもなに、邪魔をしやあしねえが、かわいいから、あしたものさ。気に入るのに入らないのと、そんなこたあ言つてくれるな」

女は少しきつとなり、

「それではあなた、あのおかたになんぞお悪いことでもございますの」

かく言い懸けて振り返りぬ。巡査はこのとき囁く声をも聞くべき距離に着々として歩しおれり。

老夫は頭を打ち掉りて、

「う、んや、吾やあいつも大好きさ。八円を大事にかけて、世の中に巡査ほどのものはないと澄ましているのが妙だ。あまり職掌を重んじて、苛酷だ、思い遣りがなさすぎると、評判の悪いのに頓着なく、すべ一本でも見免さない、アノ邪慳非道なところが、ばかにおれは気に入る。まず八円の価値はあるな。八円じゃ高くない、禄盗人とはいわ

れない、まことにりつぱな八田様だ」

女はたまらず顧みて、小腰を屈め、片手をあげてソト巡査を拝みぬ。いかにお香はこの振舞を伯父に認められじとは勉めけん。瞬間にまた頭を返して、八田がなんらの挙動をもてわれに答えしやを知らざりき。

## 五

「ええと、八田様に不足はないが、どうしてもおまえを遣うことはできないのだ。それもあいつが浮気もので、ちよいと色に迷ったばかり、おいやならよしなさい、よそを聞いてみますという、お手軽なところだと、おれも承知をしたかもしれんが、どうしてもおれが探つてみると、義延（よしのぶ 巡査の名）という男はそんな男と男が違う。なんでも思い込んだらどうしても忘れることのできない質で、やつぱりおまえと同一ように、自殺でもしたいというふうだ。ここでおもしろいて、はははははは」と冷笑えり。

女は声をふるわして、

「そんなら伯父さん、まあどうすりやいいのでございます」と思い詰めたる体にて問いぬ。

伯父は事もなげに、

「どうしてもいけないのだ。どんなにしてもいけないのだ。とてもだめだ、なんにもいな、たといどうしても肯<sup>き</sup>きやあしないから、お香、まあ、そう思ってくれ」

女はわつと泣きだしぬ。渠<sup>かれ</sup>は途中なることをも忘れたるなり。

伯父は少しも意に介せず、

「これ、一生のうちにただ一度いおうと思つて、今までおまえにもだれにもほのめかしたこともないが、ついでだから謂<sup>い</sup>つて聞かす。いいか、亡<sup>な</sup>くなつたおまえのお母<sup>つか</sup>さんはな」  
母という名を聞くやいなや女はにわか<sup>に</sup>に聞き耳立てて、

「え、お母さんが」

「むむ、亡くなつた、おまえのお母さんには、おれが、すっかり惚<sup>ほ</sup>れていたのだ」

「あら、まあ、伯父さん」

「うんや、驚くこたあない、また疑うにも及ばない。それを、そのお母さんを、おまえのお父<sup>とつ</sup>さんに奪<sup>と</sup>られたのだ。な、解<sup>わか</sup>つたか。もちろんおまえのお母さんは、おれがなんだという<sup>おとと</sup>ことも知らず、弟<sup>おとと</sup>もやつぱり知らない。おれもまた、口へ出したことはないが、心では、心では、実におりやもう、お香、おまえはその思い遣<sup>や</sup>りがあるだろう。巡査というも

のを知ってるから。婚礼の席に連なつたときや、明け暮れそのなかのいいのを見ていたおれは、ええ、これ、どんな気がしたとおまえは思う」

という声濁りて、痘痕とうこんの充みてる頬ほおほね骨ほね高たかき老顔らうがんの酒氣しゆきを帯おびたるに、一ひと眼まなこの盲くらいいたるがいとものすぎきものとなりて、拉とぐばかり力ちからを籠こめて、お香お香の肩かたを掴つかみ動うごかし、

「いまだに忘れない。どうしてもその残念ぜんぜんさが消うえ失うせない。そのためにおれはもうすべ  
ての事業しぎやうを打うち棄すてた。名譽めいよも棄すてた。家いへも棄すてた。つまりおまえの母親ぼろが、おれの生しょう  
涯がの幸福きふと、希望きぼうとをみな奪うばつたものだ。おれはもう世よの中に生きてる望のぞみはなくなつ  
たが、ただ何なにとぞしてしかえしがしたかつた、といつて寝刃ねたばを合あわせるじやあない、恋こに  
失望しつぱうしたもののその苦痛くるしみというものは、およそ、どのくらいであるといふことを、思い  
知らせたいばかりに、要いらざる生命いのちをながらえたが、慕こい合あつて望のぞみが合あうた、おまえ  
の両親りやうしんに対しては、どうしてもその味あじを知らせよう手段しゅだんがなかつた。もうちつと長生ちやうせいきを  
していいや、そのうちにはおれが仕方しかたを考かんえて思い知らせてやろうものを、ふしあわせだ  
か、しあわせだか、二人ふたりともなくなつて、残のこつたのはおまえばかり。親身おんみといつてほかに  
はないから、そこでおいらが引き取とつて、これだけの女おんなにしたのも、三代たんだい崇たかる執念しつねんで、親  
のかわりに、なあ、お香お香、きさまに思い知らせたさ。幸さいい八田やちだという意中人おんしゆじんが、おまえ

の胸にできたから、おれも望みが遂げられるんだ。さ、こういう因縁があるんだから、た  
 とい世界の金満かねもちにおれをしてくれるといったって、とても謂いうこたあ肯きかれない。覚悟  
 しろ！ 所詮しよせんだめだ。や、こいつ、耳に蓋ふたをしているな」

眼めにいつぱいの涙を漥たえて、お香はわなわなふるえながら、両袖そでを耳にあてて、せめて  
 死刑の宣告を聞くまじと勤めたるを、老夫は残酷にも引き放ちて、

「あれ！」と背そむくる耳に口、

「どうだ、解わかったか。なんでも、少しでもおまえが失望くるしみの苦痛をよけいに思い知るよう  
 にする。そのうち巡査のことをちつとでも忘れると、それ今夜のように人の婚礼を見せび  
 らかしたり、気の悪くなる談話はなしをしたり、あらゆることをして苛いじめてやる」

「あれ、伯父さん、もう私は、もう、ど、どうぞ堪忍してくださいませ。お放しなすつて、  
 え、どうしようねえ」

とおぼえず、声を放ちたり。

少し距離を隔てて巡行せる八田巡査は思わず一足前に進みぬ。渠かれはそこを通り過ぎんと  
 思いしならん。さりながら進まざりき。渠は立ち留まりて、しばらくして、たじたじと  
 あとに退さがりぬ。巡査はこのところを避けんとせしなり。されども渠は退かざりき。造次ぞうじの

間八田巡査は、木像のごとく突つ立ちぬ。さらに冷然として一定の足並みをもて肅々と歩み出だせり。ああ、恋は命なり。間接にわれをして死せしめんとする老人の談話はなしを聞くことの、いかに巡査には絶痛なりしよ。ひとたび歩を急にせんか、八田は疾とくに渠らを通り越し得たりしならん、あるいはことさらに歩をゆるうせんか、眼界の外に渠らを送遣し得たりしならん。されども渠はその職掌を堅守するため、自家が確定せし平時における一式の法則あり。交番を出でて幾曲がりの道を巡り、再び駐在所に帰るまで、歩数約三万八千九百六十二と。情のために道を迂回うかいし、あるいは疾走し、緩歩し、立りゆうてい停するは、職務に尽くすべき責任に対して、渠が屑いさぎよしとせざりしところなり。

## 六

老人はなお女の耳を捉とらえて放たず、負われ懸くるがごとくにして歩行あるきながら、

「お香、こうは謂うものなの、おれはおまえが憎かあない、死んだ母親にそっくりでかわいくつてならないのだ。憎いやつなら何もおれが仕返しをする価値ねうちはないのよ。だからな、食うことも衣きることも、なんでもおまえの好きなとおり、おりや衣ないでもおまえには衣



せる。わがままいっぱいさしてやるが、ただあればかりはどんなにしても許さんのだから  
 そう思え。おれももう取る年だし、死んだあとでと思うであろうが、そううまくはさせや  
 あしない、おれが死ぬときはきさまもいっしよだ」

恐ろしき声をもて老人が語れるその最後の言を聞くと斉しく、お香はもはや忍びかねけ  
 ん、力を極めて老人が押えたる肩を振り放し、ばたばたと駈け出だして、あわやと見る間  
 に掘端の土手へひたりと飛び乗れたり。コハ身を投ぐる！と老人は狼狽えて、引き戻  
 さんと飛び行きしが、酔眼に足場をあやまり、身を横ざまに霜を塗りて、水にざんぶと落  
 ち込みたり。

このとき疾く救護のために一躍して馳せ来たれる、八田巡査を見るよりも、

「義さん」と呼吸せわしく、お香は一声呼び懸けて、巡査の胸に額を埋めわれをも人をも  
 忘れしごとく、ひしとばかりに縋り着きぬ。鳶をその身に絡めたるまま枯木は冷然として  
 答えもなさず、堤防の上につと立ちて、角燈片手に振り翳し、水をきつと瞰下ろしたる、  
 ときに寒冷謂うべからず、見渡す限り霜白く墨より黒き水面に烈しき泡の吹き出するは老  
 夫の沈める処と覚しく、薄氷は亀裂しおれり。

八田巡査はこれを見て、躊躇するもの一秒時、手なる角燈を差し置きつ、と見れ

ば一枝の花はなかんざし簪かんざしの、徽章きしょうのごとくわが胸むねに懸かかれるが、ゆらぐばかりに動悸どうき烈はげしき、  
お香の胸とおのが胸とは、ひたと合あひてぞ放はなれがたき。両手を静しずかにふり払はらいて、  
「お退どき」

「え、どうするの」

とお香は下より巡査の顔を見上げたり。

「助けてやる」

「伯父おじいさんを？」

「伯父おじいでなくってだれが落ちた」

「でも、あなた」

巡査は儼げんぜん然ぜんとして、

「職務しよくだ」

「だってあなた」

巡査はひややかに、「職掌しよくだ」

お香はにわかあおに心着こころき、またさらに蒼あおくなりて、

「おお、そしてまああなた、あなたはちつとも泳およぎを知らないじゃありませんか」

「職掌だ」

「それだって」

「いかん、だめだもう、僕も殺したいほどの老爺おやじだが、職務だ！ 断念あきらめろ」

と突きやる手に喰くい附つくばかり、

「いけませんよう、いけませんよう。あれ、だれぞ来てくださいな。助けて、助けて」と呼び立つれど、土塀どべい石垣寂じやくとして、前後十町に行人絶えたり。

八田巡查は、声をはげまし、

「放はなさんか！」

決然として振り払えば、力かなわで手を放てる、咄嗟とつさに巡查は一躍して、棄つるがごとく身を投ぜり。お香はハツと絶え入りぬ。あわれ八田は警官として、社会より荷になえる負債を消却せんがため、あくまでその死せんことを、むしろ殺さんことを欲しつつありし悪魔を救わんとして、氷点の冷、水凍る夜半よわに泳ぎを知らざる身の、生命とともに愛を棄てぬ。後日社会は一般に八田巡查を仁なりと称せり。ああはたして仁なりや、しかも一人の渠かれが残忍かんく苛酷かこくにして、恕じよすべき老車夫を懲罰あわれし、憐あわれむべき母と子を嚴責したりし尽瘁じんすいを、讚さ歎たんするもの無きはいかん。

〔#地付き〕（明治二十八年四月「文芸倶楽部」）

底本：「高野聖」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年4月20日改版初版発行

1999（平成11）年2月10日改版40版発行

初出：「文芸倶楽部」

1895（明治28）年4月

入力：真先芳秋

校正：鈴木厚司

1999年9月10日公開

2005年12月4日修正

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

## 巻数

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 サンプルサークル  
著者 作者  
URL <http://writer.sample.org/>  
E-Mail [writer@sample.org](mailto:writer@sample.org)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>